

スタンフォード日本センター研究部門所長

中村 伊知哉氏



なかむら・いちや 1961年生まれ、京都市出身。京都大卒。郵政省で情報通信行政を担当。98年に渡米、MIT客員教授。2002年秋から現職。こどもの創造力をはぐくむNPO「CANVAS」副理事長、国際IT財団専務理事、CSK顧問、音楽制作者連盟顧問などを兼務。

# デジタルの1000年始まる

みどり、おおあか、きいろ。パソコンの画面に曲線をひく。長い線、ぶつ切した線。こどもたちがひくクレヨンのような線がメロディーやリズムを奏でる。うかがいのような画面が曲になる。聴いたことのない、荘重な交響曲だ。全作品をインターネットで聴くことができる。音楽の知識がなくてもいい。楽器が弾けなくてもいい。じぶん作曲をやって、ネットで世界に発表してみよう。いっしょに曲を作ってみよう。メロディーやリズムでコミュニケーションし

てみよう。  
■都の美の遺伝子  
こどもは、京都府精華町にあるこどもセンター「CAM」。ハイパーコアという名のパソコンソフトを使った音楽ワークショップである。このソフトは、CSKとセガが資金を出してMIT（マサチューセッツ工科大学）で開発したものだ。技術はアメリカから持ち込んだが、表現は日本のこどもが作る。都の地に千年を超える時間の中には、くまれてきた美の遺伝子が

紡ぎ出す。ケータイを使いこなして、目撃ゲームやアニメで鍛えている日本のデジタルキッズ

# 提言

## こどもの表現世界をリード

は世界の表現をリードする。ITを使ったこどもの活動は、小中学校でも広がりを見せ

つつある。「私のこども館」のような公共空間でもワークショップが開かれている。それらを支えるデジタル技術の面でも京都是先進地だ。ゲームやケータイの分野では世界に冠たる企業が名を連ねる。トップクラスの大学もある。ITでは国際的に知られる「ATR」のような研究機関もある。

■今、闇から光が  
さき、エス「京都デジタルキッズ」という協議会が発足した。美意識と先端技術が融合する京都のユニークな取り組みをもっと発展させようというプロジェクトだ。デジタルのハード、ソフト双方に携わる人々の集まりとして、ひたすらこどもに関する取り組みから始めていく。京都が隠し持っていたものを結合して、新しく楽しい企画を作り

出す、世界に発信する。京都府の音頭取りにより、NPO「CANVAS」、スタンフォード日本センター、京都西陣町家スタジオの共催で運営される。音楽ワークショップがはねてから、数名で先斗町にくりだした。自分が大学生のころ、この路は怖くて近づけなかった。夜、淡い黒の空の下、濃い黒の東山が連なり、その下を鴨川が黒く流れる。これに沿って黒屏の連なる静かな細い歓楽路は、一部の大人の秘められた世界だった。いつの間にか、若いアベックが気楽に練り歩くポップで明るいスポットに様変わりしていた。町家もしゃれたレストランやアパレルに変身したりしている。ほかに京都はまだ深い秘密を隠しているに違いない。

先斗町のポイントとは、ポルトガル語の「先端」だという。中国の都に倣って建設した京都の都は、ポルトガルの先進技術を取り入れた。その後長く日本はヨーロッパに学び、近年はアメリカにあこがれている。アナログの千年、日本は世界の先端を追いかけてきた。その間、幾多の男も女もが、この小路を通り抜けてきた。そして今、かつての闇は、外に向かって光を放とうとしている。  
アナログの千年が終わわり、デジタルの千年が始まる。光か、闇か。アナログ世代の大人には、見通しがきかない。こどもたち、切り拓いてもらおう。さきがけとなって走るこどもたちに、技術と活動の場を与えたい。大人にできるのは、与えて、見守り、ほめることだろう。

# オピニオン 解説